

可認物便郵種三第當信選日六十二月二十年一十三治明
行發日五十一月一二月每 行發日一月三年六十三治明



政教時報

第九十八號

論說

宗教は人生の根帯を自覺せしむ

〔社説〕
今井昇道

本末輕重論

佐々木月樞

社會

●飾りなき禮俗 ●成功の意義 ●偶語
〔海外事蹟〕

雜錄

印度無聊
在印度 泥佛、啞云

三種の人
和田 鼎

余の幼時
小 寛 生

▲關文字▼

講究

勞働者保護法
池山榮吉

▲報道一束▼
▲通信一節▼

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を奨励し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査する事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨励して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨励する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむる策を講ずる事。

政教時報

宗教は人生の根柢と

自覺せしむ

(信仰と苦悶)

宗教と云へば殆んど人生已外のことの様に考ふる弊がある、これは大なる誤である、若し果して人生已外のことならば人間の企て及ぶべからざることにして、如何程高尚であらうとも如何程微妙であらうとも何の益もない、宗教は寧ろ人生に最も適切なるものである、人生の眞髓を窺むるものである、切言すれば人生の人生たる眞意義を自覺せしむるものである、かく宗教を人生的のこと、解すれば、又反對の極端に趨りて宗教を全く社會的の意味に解釋し、人生界一種の現象にして、全く内心の投影に外ならずと考ふる様になる、此點よりみれば宗教は詩歌音楽と同じく、人文史上の一要素に過ぎない淺薄なるものと考ふる様になる、是は亦大なる誤である、たしかに宗教は人生的のものではあるが、人生の表面にあらはるる一顯象位のことではない、人生の全体を徹観したるものである、人生の始終を自覺することである、切言すれば人生の根柢を極めて、而して其人生なるもの、價値、人生

なるもの、運命、進みて人生なるものが如何に靈界に接觸し、如何なる位置をとりつゝあるかを自覺することである。

吾人が頻りに實驗的宗教を主張する所以は、即ち此自覺を切勵するのである、屢々苦悶につきて云云するも、決して苦悶其物が必要であると云ふのではない、人生の極限を自覺するの一場合として、古來宗教上の實驗上、苦悶の結果安心を得たる人が多いのである、若し苦悶が信仰の要素の如く考ふるならば大なる誤である、全体人生の根柢を知るには人生の極限に達することが必要である、例せば死の問題とか、病氣に罹るとか、非常なる最大不幸に陥るとか、絶体絶命の厄難を被るとか、極端なる事例を擧ぐれば、墮落して殆んど人生を滅さんとするとか、絶望して自殺を企つるとか、古來此等の場合に於て非常なる信仰を得たる人が多い、されど此等か宗教の要素であると云ふのではない、唯此の如き場合に人生の極限を自覺した迄である、若し上來列擧したるものが宗教の信仰上の必要の條件とすれば、宗教の信仰程不健全なるものはない、宗教の信仰程危険なるものはない、唯此の如き場合に人生として試み得らるべき凡てを實驗して、人生は此位なものである、人間の力は此所にて極まるものである、人情は此邊にて盡さるものであると悟るのである、平時不眞面目で暮して居るときは、何氣なく過ぎつゝあるも、愈々となれば

人間は此程冷淡なものである、酷薄なものである、無趣味なものである、滑稽なものであると知るのである。如何程奮發しても人間は人間である、如何程心を清めても煩惱は無盡藏である、親子と雖、此邊涯を越ゆへからず、兄弟と雖、此靈壁に至りて極るものである、死の問題や如何、所謂獨生獨死獨去獨來である、未來の問題や如何、後生は獨り凌ぎ所謂親戀は父母孝養の爲めに念佛一邊も申したること候はずである、此人生の邊畔に至りて人間の力は既に絶へて、初めて絶跡無限の力は始まるのである、此處に至りて人生の危殆なることが分かりて、靈界の地盤の上に立つべき必要が来るのである、人溺れむとするや必ず固く摠み、人斃れむとして必ず杖を握る、其間髪を容れず、決して苦悶其物に何等の必要もなき、唯苦悶によりて人生の極限を知りて、絶對佛陀の偉力なる力が初めて光輝を發するのである。

人生は一種の囹圄である、狹隘なる水滸である、此囹圄に居り乍ら囹圄たることを自覺せず、悠々として醉生夢死しつゝあるのが凡俗的生活である、然るに四方八面の鐵檻に突き當りて初めて之を自覺するのである、狹隘なる水滸を以て江湖の如く考へて彷徨自得して居るのが小魚の實況である、然るに彼處此處の土沙瓦礫に妨げられて、如何に淺水雨滸の中に生活しつゝあつたかを悟るのである、囹圄中に苦悶するこ

と、水滸の中に不満を訴るのが、決して安心する要件ではない、如何にも叩かざれば開かれず、求めずば與へられぬ、されど叩くのは開くためである、求むるのは得るためである、然るに開くのを忘れて叩くことが信仰と考へ、與へられむことを勉めず求むるのを信仰と考ふる一種の誤がある、甚しきは叩けぬと嘆き、求められぬと哀むに至るものがある、所謂急急作して晝夜十二時に頭燃を拂ふが如くするも、凡て雜毒の善と名くとあるが此點である、惠可腕を斬て抛つ、腕を斬つたのが要點でない、心を求めて不可得なるを悟つた點が必要なのである、釋尊六年の苦行、遂に尼連禪河に沐して一命を捨てむとせられた、されど苦行は毫も解脱に利益がなかつたが樹下の降魔得道の大樂境を迫り出した道行である、オーガステンの墮落、ルーテルの苦悶、何れも人生の極限を知るの一場合たるに過ぎないのである。

一たび苦悶の暗を破り來りたるときは忽ち世界は光明界である、人生の極限を悟りして絶對の靈界に手が達したるときは、人生の邊畔を沒了するのである、戸を排して蒼穹を望む即ち室内は天空と連るのである、首を回らせは今の小人生は豈圖らむや、永久の靈活の生命と連續して、悠久なる生活を吾人日常の行動の上に持來するのである、此に於てや我向ふ所佛之を助け、我據り立つべきもの、獨り佛陀の大威神の他

に何物もなき様になる、此に至りて苦悶は宿夢の如きものである。

本末輕重論

今井 昇道

物本末あり、事終始ありと云ひ、其本亂れて末治まるものはあらずとは、千古の格言にして、大は宇宙の運行より、小はアミーバーの活動まで、一として此法則に漏るゝものはあらず。之を國家の上に云はゞ、其國家が、世界に對して貢獻せざるべからざる所以のもの、即其が存在の第一理由は、即其國家の究竟の第一義にして、これありて君主あり、臣民あり、行政あり、司法あり、之を一家の上に云はゞ、其一家が、近く國家に對し、遠く世界に對して、寄與せざるべからざる所以のもの、即一家存在の第一理由は、即其一家の第一根本にして、上にありて父母あり、子孫あり、兄弟あり、姉妹存す。それ爾り、一國も一家も其存在の第一根本義は、極言すれば、宇宙最終の目的に、寄與貢獻する事なるを以て、若一國一家にして、既に此貢獻を爲し終りたりとせんか、若くは何等の寄與を爲す能はざるに至るとせんか、其國其家は、最早社會上に存在すべき權利を有せず、宇宙に成立すべき價値を有せず。之に於てか國に内亂外寇を生し、家に不和争鬪を

生し、以て要なき其形骸を破壊し去らすんは止まず。此の如く、一國一家の第一根本義は、其宇宙の內的に貢獻すべきものなりと雖、此第一根本義を、其が意識するとせざるとに關らず、之を遂行し、之に背戻するの上に於て、本末を論すれば、云ふ迄もなく、國家に於ては主君其本にして、家族に於ては父母即ち其中心なり。故に一國にして其君主宜しからず、一家にして其父母亂れたりとせば、其國亂れ、其家破るゝ事、又動かすべからざる事なりとす。人に宗教心あり、世に宗教の存在する根本理由は、實に人類全体が、其不可思議の墮落に依りて、生死海に流轉するに至りたれとも、内本有の眞性あり、外に宇宙の本願あり、再何等かの方法に依りて、其本源に復返せざるべからざるが爲なり、若一切の生類にして、悉其眞性を開發し、其本家に復返するの曉には、最早宗教は世に存在の要なく、隨て其存在を失ふに至らん。一般宗教の特殊の形を爲せるもの、佛教にまれ、基督教にまれ、又各其必要に依りて世に顯はれ、存在し、最後に其使命を果して消失するものなり。之れを我大谷派本山の消長盛衰、近くは近時の一大問題たる本山維持の根本策に見る、又同一の理由を繰返さるべからず、此の點に就ては、我敬慕措く能はざる新法主臺下、前に万朝報記者に對して語らせ給ふ所、左に其の二三を摘録し

て、聊か尊意のある所を布演し、以て本末輕重論を終らんと欲す。

萬朝報、二千三百八十一號『東本願寺の前途』の下に、其意を瀟々し給はく、本山の財政整理は、甚困難らしく人は云へど、私は左程困難とは思はれず。本山維持の根本は門徒の信仰心を培養するにあり。此信仰心冷却し去れば、本山の維持は到底出来得べきに非ず。故に今日に於て、財政整理を本山維持の急務と認むる事は、事の末輕重を誤まれるものにして、私は布教に盡力するを以て、寧ろ今日の急務にして、又財政整理の根本策なりと確信す。蓋門徒増加し、信仰厚くなれば、本山の収入は期せずして増加し、負債の償却又自然に成し得べければなり。然るに又布教には多額の費用を要す、之を難するものあり、私は之にも反對なり。何となれば、布教の方法次第、必しも多額の金を要せず、今若法主以下、自ら勞苦して四方に巡迴布教せば、信徒は催促せずして本山の爲に出金せんと望み得べからず。

從來本山の使僧等、四方に派遣せられて、至る所直に金の催促を爲すを以て、門徒は使僧を嫌ふて取合はず、是金を得んと欲して却て金を失ふものなり。私の見る所を以てすれば、布教信仰の一方に熱中すれば、金は求めずして自然に來るものなり、我宗親鸞聖人の如き、雖も此の如き大伽藍を造るの心なく、一人にても熱心に勤化して、眞正の信徒を作るを以て目的とせられしならん、當時今日とは時勢相同しからざるも、單に形而下の事にのみ重きを置きて、心性開拓を忽にせば、雖も宗運衰頽に及ばん事必せり。私は今日自分相當の道に依り、自ら布教に盡力し、内宗祖の遺志を發揚するを極めて肝要なりと信ず、大伽藍の中に飽食暖衣して、碌々祖業を擴張するを知らざるは、相濟まざる次第なり。

と、これ實に我新法主臺下の、朝報記者に對して語らせ給へる本山維持の根本策なり。吾人雜僧、此堂々たる臺下の尊命に對し奉りて、誠惶誠恐又何をか云ひ得べき。然りと雖、我臺下にして此の如き信念に立ち、此の如き見地に住し給ふを

見ては、我等末徒の身として、歡喜贊仰止む能はず、即不遜にも其尊意を掬み、其眞意を述べ聊自己に感激の情をもらんと欲するのみ。

要するに臺下の語らせ給ふ所は、第一本山の根本維持策は、信仰と其宣傳にある事、第二本山の維持は、始末問題にして、信仰宣傳の自然の結果なる事、第三財政整理を急務として、信仰宣傳を顧みざる本山は、却て衰亡に赴くべき事、第四我親鸞聖人は、實に此が實行者にして、今日本山の盛運は、其聖人の信仰宣傳の自然の結果なりし事、第五自己は自分今日相當の方法に依りて、此聖人の遺風を慕ひ、布教傳導に一身を捧ぐべき事これなり。

抑我大谷派本願寺たる、實に我新法主臺下の語らせ給ふ如く、決して偶然に成立せるものに非ず。宗祖親鸞大師、二十九年の憂悶を經、苦呻を重ね、心性の開拓其極に達し、宇宙に彌滿し、人心に潜在する、無作無縁の大智、大悲、大願、大光明を發見し、之と融合し、無義の義、自然往生の理を辨得し、證悟し、近く釋迦出世の素懷を發展し、遠く宇宙一切宗教が、觸れんとして觸るゝ能はず、云はんとして云ふ能はざる、廣大無碍の大願、大信を開闢す。忽にして宇宙人生の解決を得、生死岸頭大安立の地を得、朝に信仰往生の理に感泣し、夕に證大涅槃の眞因決了を踰躍し給ふ。

且又思ふ、吾宿縁深厚にして、幸に心を佛地に樹て、情を法海に流すの大靈福を受く。而も心愛欲の廣海に沈没し、情名利の大山に迷惑し、小慈小悲もなき身にて、名利に人師を好むの陋劣至醜の情あり。此の如き陋劣怯弱の吾、奈何て清淨眞實なる光明眞理の宣傳に任へんや、されは吾自ら立て世を導く自力を廻らさんより、唯常に大靈の無作に作させ給ふまに、隨ひ、常に其廣大無碍の靈力の、讃仰者歡喜者たるらんのみ、吾もとより無慚無愧の此身にて、まことのこゝろはなけれとも、得る所の南無阿彌陀佛の大眞理大尊號は、畏くもこれ彌陀廻向の法、豈功德の十方に滿ち給はざる理あらんやと。

聖人は其信仰に於て他力に任せ玉ふのみならず、自然往生の謂に契はせ給ふのみならず、又傳導の方面に於ても、彌陀自然の願力に任せ給ひたるなり。聖人豈一宗開闢の野心あらんや。本山建設の欲念あらんや、聖人は行雲流水の如く、唯他力の風の吹くまに、或は北越の雪に交り、東國の水に彷徨ひ、又京都の花に遊ひ給へり。聖人は唯止むなくして佛徳を稱へ、止むなくして大眞理を語り給ふ。されば聖人には唯晃々たる、佛身も光りも等しくて、圓好金山の如き、唯一佛陀の存在し給ふのみ。無作無縁にして、而も法界に荒れ廻り給ふ。無碍廣大の威力存在し給ふのみ。聖人は此唯一佛陀、唯一威力の讃嘆者のみ、渴仰者のみ、豈師弟あらんや。豈門

す、光景一變又昔日の比にあらず、大は世界の存在より、小は芥子の微に至る迄、世界の發達も、人文の盛衰も、此大眞理を除きて何等の生命なく、意義なく、唯此神聖なる最終目的に對して、初めて存在し發達するを見る、換言すれば、聖人の淵大なる心靈の大堂には、花の開くも鳥の啼ぶるも、此神聖なる意義を通じて顯はれ、國家の成立も社會の存在も、此神聖なる關係の下に顯はる。國家も獨立には存在せず、社會も依存して初めて價值あり。オーゴスチンの信仰蓋此にあり、羅馬法皇の努力實に茲にあり。

聖人那の大眞理を得證し、此大見解に住し給ふ、聖人の心靈は熱して火の如く、燃へて炎の如く、百万の身、無數の法を以て、是非とも一切生類を此大眞理に救拯せんと衝欲し給ふ。

然りと雖、備我他力發得の信仰を思ふ、我賢くて信するにあらず、我苦しみて與へられたるに非ず。偏にこれ阿彌陀の大靈が、其无作無縁の大願力、大慈悲力を以て、我を導き、我を誘ひ、或は求道の熱情を與へ、或は苦悶の谷に沈め、遂に此廣大無碍の淨信を廻施し給ふ。一切群生に對する又此の如からん。まことに大靈や無作にして作さる所なく、願力や無縁にして縁せざるなく、常に法界に望み、宇宙を照鑑し給ふ。如かす自力の廻向を捨て果て、此無作の大力に任せ奉らんのみと。

信徒あらんや、共にこれ唯一佛陀の前に立つ、同行者なり。唯一威力に導かれ、教へられ、安せられ、救はる、御同朋なり、彼は光明の指導のまゝに、關東北越京地所定めす流浪し給へり。其大魂の彌陀覺王の本宗に假り給ふ迄、實に此の如かりき。

如是、我親鸞聖人は、其信仰に於て自然に契當せるのみならず、其傳導に於ても又眞理に冥合し給へり。これ万善の中心万徳の基礎、見よ聖人は此信仰に依りて、今六合の樞軸となり、大千の上に巍乎として立ち給へり。深く冥加に契ひ、冥祐を受くるに任ゆ、謝すべき哉、流離散漫喪家の犬の如き生涯を送り給へる聖人の血脈法流は、今本派本願寺となり、高田專修寺となり、興正寺となり、佛光寺となり、錦織寺となり、又我大谷派本願寺となりて、自然にオーゴスチンの理想を實現し、羅馬教會の盛運を示す。されば今日の眞宗各宗の本山はこれ聖人の期せずして、而も其希望の幾方の顯はれたるものこれ唯一佛陀の無作の作にあらずや、无力の力ならずや、我聖人の他力の力に非ずや、自然の然に非ずや。

特に我大谷派の如き、常に本派と並びて聖人の信念に一味し、聖人の遺風を慕ひ、常に敢て及はざる事を恐れたり。而して我本願寺近時漸財政大に窮乏し、内訌絶えず、屢醜態を世に暴露するに至る、威信落ち信用落ち、度すべき人々より反て度せられんとす。若今日迄の盛にして佛の冥加に契へる

の證とせば、今日の衰兆はこれ又其所に深き冥慮の存するものなりと信せざるべからず。其本亂れて未治まるはなし、宗祖聖人の大信念、大宏風漸失はれて、徒に形骸の枝末に走りつゝある爲に非るか。

我新法主臺下、夙に此に鑑み給ふ所ありて、翼々として聖人の高風を慕ひ、信念に學び、身を挺して今日の本山を聖人の當時に復らしめんとつとめ給ふ。萬朝報記者に語り給ふ所は、今の本山維持策に對する解答なれば、布教を以て本山維持の根本策と云ひ、信念の培養を以て本山維持の根本なりとの給ふと雖、若更に臺下の尊意を酌み、其第一義諦を窺はば實に本山もなく、末寺もなく、布教もなく、傳導もなく、唯七百年の昔、大千に出世し給へる我親鸞聖人の如く、信仰生自然の眞理に一味し、南無阿彌陀佛の六字の活動体となり、一舉一動皆唯一佛陀に依り、布教傳導唯此唯一威力の爲し給ふまにせんと思ふ事と信せざるべからず。此信念これ廣大無碍の淨信、威徳廣大の眞心、萬善の中心萬徳の輻湊所なれば、利他救済の大悲行も、いかて此中に含蓄せられざるべき、まして一本山の維持隆盛の事をや。

宗教に於て、其根本中心は此廣大なる淨信なり、本山に於て其根本中心は其法嗣相承者なり。幸なる哉我大谷派本願寺は、今や頗財政問題に苦しみ、醜態を世に暴らしつゝありと雖、其根本中心たる新法主臺下の上に、此廣大なる信念降り、

此無我の大佛事を營まんとし給ふ。若此事にして果して眞に佛陀の冥祐に契ふとせば、豈僅小なる本山維持に貴重なる心意を煩はすを須ひんや、まして今の財政整理事件をや。

論者或は云はん、信仰と棄捨と元來何の關係がある。信念と本山維持と何の脈絡がある。其は我等の知る所にあらず、されど彌陀大覺王は、常に此賤しき金錢を以て、本山を作り、信者を作り、佛を作り給ひつゝあるは、我等奈何にするも疑ふ能はざる所。理論は兎まれ、事實に於て自ら然るを奈何せん。識者或は云はん、臺下の事は誠惶誠恐一言の擬議を加ふへからざるも卿の云ふ所はあまりに迂遠ならずや、理想の語ならずや。云ふ所即眞なりと雖、焦眉の急を救ふには足らざらんと、噫これ他力を危み、他力を疑ふ、自力計度の迷執の脱せざる人の心事のみ。他力には義なきを義とす、凡夫の計なきを以て此佛の光榮とし徳とし給ふ所。よし迂遠の法なりとするも、眞理は即眞理。親鸞聖人を師とも父ともたのみ我等は、いかて之に隨はざるべき。見よ他力の妙味を知らざるの世人すら、尙且急にはまわれと教ゆるに非ずや。我等は云ふを憚り、語るを恐るゝと雖、我親鸞聖人を師父とし、我新法主臺下を師兄とし、等しく南無阿彌陀佛の分身として、南無阿彌陀佛の大威力に隨ひ、以て現當一切事件の解決を得んと欲するのみ。

吾等大谷派本山を愛へざるに非ず、愛ふるが故に特に本山

絶待他力論

佐々木 月 樵

の存亡消長を念頭に措かざらんとす。吾等眞宗の命運を慮からざるに非ず、慮かるか故に特に眞宗其物の命運に就て考ふるなからんと欲す。これ物本末あり、事終始あり、其本亂れて未治まるもの非ればなり。

頃日臺下の本山維持の根本策を拜し、感激にたえず、聊本末輕重論を作る。

絶待他力の信仰が、理性によりて成立するか、感情によりて成立するか、或はまた意志によりて成立するか、の如きは、畢竟、我等にとりては、全然無關係のことなり、理性と呼ぶものをして、理性と呼ばしめよ、感情といふものをして、感情といはしめよ。意志と考ふるものをして、意志と考へしめよ。その名は、何にても可なり。その義は、何にても附すべし。太陽は、天文學者の爲めには、大なる火塊と名けらるゝも、怒らざるなり。太陽は、自然崇拜者の爲めには、神佛とあがめらるゝも、喜はざるなり。信仰は、常に信仰にして、太陽は、常に太陽なり、道友諸君、爾等、知らずや、太陽は、その名義、その説明の如何にか、はらず、常に、我等を照し我等を養ひ、我等を導きつゝあるにあらずや。

信仰は、他道信仰なり。絶待他力の信仰は、決して他よりして何故かの疑問を挟むべき餘地を有せざるものなり。その成立するや、到底、他のよりて以て、之を分解し、之を説明すべき餘地を有せざるものなり。否、他のみにあらず、それ自身に於てすら、到底、その分解、その説明を企つ能はざるものなり、何となれば、絶待他力の信仰は、何故かの疑問を挟むべからざる所に生じ、分解も、説明も施する能はざる所に獲得したるものなればなり。満天、細雲なく、日麗かなり、人呼んで好き天気なりといふ。何人か、この語に對して、何故かの疑問を挟むことを得べきか。一に一を合して二といひ、二に二を加へて四と稱す。誰か、之を分解し、之を分析して、二なり、或は四なる所以を説明し盡すを得るか、恐くは、天下何人と雖へども、好き天気なるが故に、好き天気なり、二に二を合すれば、四なるが故に、二に二が四なりと答ふるの外なけむ。然り、その答やよし。これ誠に自明の道理なり、自覺の信仰なり、既に自明なるが故に、更に説明す可らず、自覺なるが故に、更に分解すべからず。その間、いかてか、自他ともに、何故かの疑問を發し得べきぞや。天気晴る。是に於てか、われら天気なりと思はざらんと欲するも、かく思はざる能はざるを如何せむ。二に二を加ふ。われら、三なりと信ぜんと欲するも、信ざる能はざるを如何せむ。今日、我等が自己の罪惡を覺知し、如來の救済を信じ、こゝに、大

悲の攝護を歡ぶこと、豈に、この理に外ならんや。信すべからざるものを信するは、盲信なり。明ならざるものを信するは、迷信なり、この故に、絶待他力の信仰は、盲信にあらず、迷信にあらず、畢竟、信すべきことは、他道、之を信じ、信すべからざることは、他道、之を信ぜざるに外ならざるなり。現に、我等が如來の救済を信じ、常に大悲の攝護を歡ぶは、如何に信ぜざらんと欲するも、信ぜざる能はざるが故に之を信じ、歡ばざらんと欲するも、歡ばざる能はざるが故に之を歡ぶなり。絶待他力の信仰や。實驗的なり、この故に、説明すべからず。生命あり、この故に、分析すべからず。何故かの疑問を挟み得るが如き、不定、不明、不確實のものにはあらざるなり。

説明によりて作られたるものは、説明によりて破らるべし。分析によりて認められたるものは、分析によりて消ぬべし。前提によりて成立したる結論は、前提によりて破壊せらるべし。今日、我等が歡く絶待他力の信仰は、説明によりて作られたるものならざるなり。分析によりて認められたるものならざるなり。前提なき結論なり。除外なき断定なり。結論せざるべからざる所に生じたる結論なり。断定せざるべからざる所に生じたる断定なり。前提なきが故に變せず、除外なきが故に、一切包括せざるものなし。實に然り、絶待他力の信仰は、凡夫自力のはからひの脱却せられたる時、自然に

社 會

飾りふき禮俗

生ずる絶待不思議の妙用に外ならず。陽春、萬葉の花、爾、何故に咲くや、潺湲、野川の水、爾、何故に流るや、嚶々、林間の鳥、爾、何故に歌ふや。

眞理は唯一なり。花の咲く、水の流る、鳥の歌ふ、或はまた我等の信する、その理、豈に二あらんや、その理、豈に二あらんや。

大悲の光中共に新年を迎へしを喜ぶ。弟は此七月まで當地に居り、次て英に一ケ年、佛に半年を消し、印度を経て歸朝致度考に候。考證の學、要するに慧眼開發の爲にあらず、印度内地の波羅門の徒は、その智見禪定滔々たる吾國の大乗佛教徒に勝る、萬々なるを思へばに候。

一月十日 獨逸にて 渡邊海旭

維新已來、政治、法律、經濟諸般の制度は稍々整頓したりと雖、社會風俗の儀表に至りては、封建時代の繁縟を尙ぶものあり、或は繁縟に堪えずして簡易を主とするものあり、十人十色、雜然として一定する所なし、繁縟を尙ぶの弊や虚儀虚飾に流れ、簡易を主とするものは其節を失ふこと多し、社會の禮俗、風習をつくる亦甚た難しと云はざるべからず、例せば婚姻の如き、葬儀の如き民間に於ては殆ど一定する所なく、各自意の欲する所に從ふのみ、是等の儀表は著しく外觀に表はれ人目を惹くのを以て、能ふだけ、奢を競ひ華を好み儀表遂に儀表たらずして、滔々として虚飾虚禮に奔らしむ。

意ふに人間の弱點は虚榮を好むにあり、人の前を繕ふにあり、赤裸々、天真爛漫たる動作を露はすは、今の人には絶えて望むこと能はざるなり、彼のケチンボを以て有名なる支那人と雖、婚姻の式に費す額は全資産の半を抛つも尙足らざるの色あり、之か爲めに破産を招くもの頗る多しと云ふ、要するに一種の虚榮心に過さざるなり。

それ禮俗風習は社會の秩序なり、國家の綱紀なり、盛觀を

張る可なり、飾りを用ふべからず、簡易を貴ぶ可なり、節を失ふべからず、要は極端より極端に走りて其中道を逸せざるにあるのみ、婚姻は人生一代の華なり、相當に儀表を行ふと共に満腹の喜悅を捧げて其人將來の前途を祈るを以て、婚儀の要素とせざるべからず、徒に婚席に列して放歌亂舞、鯨飲の醜態を演ずるは禮俗を教る甚しきものにしていたく慎むべきものとす、殊に葬式の如きは一層謹慎の態度を以て之に臨まざるべからず、都會の葬式は宛として祭禮の趣あり、而して他人敢て異まざるもの、如し、生花を捧ぐる可なりとするも、放鳥の如きは斷乎として排斥せざるべからず、たとへ之を放つもの、葬儀の爲めに態と之を捕ふる無慈悲の沙汰の限りなり、慈悲を行はんとして却て無情の行爲を取て、これ矛盾なり、これ虚飾の禮なり、甚しきは馬車を驅り腕車を馳らして會葬す、車上相顧みて啼々笑語毫も悲哀の容態あるなし、煙草を喫するもの、欠伸をなすものに至りては大概皆然らざるはなし、何ぞ不行儀の甚しきや。

人生悲哀の事多し、然れども死別より悲しきはなし、此最大の悲哀を葬り行くべき列に加りて、肅然として容を改め、愁然として憂を表すべきに、却て喧騒雜沓ながら祭禮場に臨みたるの感あり、これ死者に對して敬意を表すべき道にあらず、また禮節の中道を得たるものにあらず、親屬故舊の多きを誇らん爲め、車馬を用ひて葬儀を虚飾するは虚禮の甚し

訣なるものあらむや、成功前若し秘訣ありとせば、それは失敗を重ねるにあり、失敗愈々多くして經驗益々積み、かくて經驗の効績は遂に成功の大山を築く也、之には勤勉の力と、忍耐の力を要することは勿論なりとす、成功の意義豈他あらんや、勤勉と忍耐なきものは未だ與に成功を談するに足らざる也。

偶 語

◎昨冬高輪の佛教大學は、基督教徒たる内村、徳富二氏を招致して、其講演をき、ぬ、人にて奇となせり。
 ◎今春二月谷中真宗中學、また異教徒の徳富蘇峯氏を聘して、その講演をき、ぬ、人にて寛容の徳を稱す。
 ◎臨時總選舉遂に結了せり、其慮し得たるものは何物ぞや、曰く罪惡の歴史のみ。
 ◎希くは當局者よ、解散を敢てする勿れ、吾は再び罪惡を繰り返さるゝを怖るゝもの也。
 ◎希くは當局者よ、議員の年期を長くせよ、之によりて罪惡は幾分たりとも減ずるを得ん哉。

きものと云ふべし、吾人は一日故小松宮殿下の國葬を拜觀して、渺なからぬ感想を抱きぬ、會葬者は各皇族を始とし皆當代知名の士、孰れも徒歩にて靈柩を送り奉りぬ、其數殆ど萬を以て計ふる程なりしも、肅々として一步も紊さず、一語も交はさず、敬意の至情各々其面に溢れぬ、かくてこそ會葬者の面目を保つものと云ふべし、由來會葬者は決して車馬を用ゐることなく、徒歩棺後に従ふことに一定せば、飾り多き葬儀は變じて良風の禮儀となり、此間に社會の秩序は井然として整ふことを得ん、要は飾りなき禮俗を養ふにあり。

成功の意義

近來成功の語何ぞを流行するや、成功したるものを以て偉人とし、然らざるものは以て凡庸となす、此に於て乎成功とは何ぞやの疑問起らざるべからず、代議士に當選したるも成功也、辯護士試験に登第したるも成功也、金儲けしたるも成功也、ある一事を成し一業を遂げる人もまた成功也、成功の成否を以て、人物の價値を高下し、一を偉人とし一を凡庸として斥くるが如きは誤りも甚しきと云ふべし、殊に多くの人が成功の語を以て一攫千金山師的の意義を包含するものゝ如く思ひ、早く成功を望まんとして頻りにあせるの氣味あり、成功爾かく容易なるものならんや、殊に現代の青年輩は成功の秘訣を問ふもの多し、成功豈秘

海外事順

◎社會黨の基督觀 去年の十二月二十五日、即、耶蘇降誕祭に、獨逸社會黨の中央機關新聞「前進」は、其の社説の冒頭に稀有しくも基督に對して賛辭を呈したはよいが、其代りに、其の腹愈ともいふ譯でもあるまいが、中頃から相變らずの教會攻撃と出掛けた。左に其の論旨を掲げて見やう。

▲曰く、吾人社會黨員と雖も、基督が人文史上に於ける偉人の一人なるとは十分に之を認めるのであるが、併し歴史が基督に就て吾人に傳へる所のものは甚だ多くない。若し基督といふ人格を一定の杓子定規に當て窺つて觀察するならば、彼は寧ろ最も不羈にして、最も純粹なる個人主義者と看做さるべきものと思ふ。蓋し彼は全然自己の思ふ儘に振舞ひ、獨特の道を歩んだものである。彼の眼中に存したのは、獨り靈聖的、精神的の目的のみで、政治的の視點、目的は全く彼の關知しなかつた所である。されば、彼は當時彼の國民間に流布したる政治的思想、即、「メシヤス」なる理想の中から、全然政治的意義を取去つてしまつて、之に代へて純粹の宗教的目的を以て満たした次第である。

▲彼れ基督の本領は、一言以て之を掩へば、彼は神を發見し得たりと信じ、この發見したるものを當時の彼の同胞に啓示

し得べしと信じたるにある。而して彼は強健無比の膽力を以てこの觀念を固執し、この目的を遂行せんことを努めた、さればこそ彼は今日と雖も、眞に宗教の必要を感じる輩には、他に於ては求めて得べからざる價値を傳授することを得るのであるし、又宗教に冷淡なるものと雖も、彼の話したりと言ひ傳ふる言語の中に於て、偉大と特長とを感ずる譯である。彼は又最後に、人間がこの世に於て爲し得べき最も偉大なる事を爲し遂げた。即彼は彼の主義の爲めに死に就いたことである。是を以て、彼は遠き歴史の間に掩はれながらも、尊崇すべき、偉大なる精神として、人文史上に一大痕跡を留めたる精神として、今日尙ほ吾人の前に現はれて居るので、此の尊崇すべき、偉大なる精神に對しては、吾人は今日この祭日に當つて敬意を表するに吝ならぬのである。

▲併し乍ら、吾人は到底今日の教會を和衷しやうとは思はぬ。吾人は今日の教會を以て決して基督の弟子とは認めない。其故は、彼等は最も主要の點に於て基督に對して、信を守つて居らぬからである。熱情に燃えんとせる大工(基督のことをいふ)の質樸なる平民的態度は、教會より消え去つて既に久しいもので、却て其の大工から一の神が出来て了つた。基督が人間的の苦惱の滅すべからざるを説いたのは、當時の遺傳的思想に厝胎したものであるのに、教會は今日尙ほ依然としてこの苦惱不滅を以て神の律であると唱へて居る。

ある。

▲吾人は今日この祭日に當て、益々吾人同志の團結を鞏固にし、社會主義に對して誠實を誓はん、實にこの社會主義たるや、吾人の生死を價するものである。吾人は今日この祭日と、單に口に愛を説く者としてではなく、人道、友愛の實行者として祝さんとするものである。吾人は、サレの人(基督)の精神は吾人の側にありて、彼れ説教者の側に存せざることを確認するものである。

▲斯く一方に社會黨の機關新聞が、大聲教會を罵るかとおもふと、他の一方には、中央黨(即加持力)の機關新聞「日耳曼」は、疾呼社會黨を責めて、神意に反抗せんとするは非基督教的である、命令すべき權利を有する者の命令に服従せざらんとするは反基督教的である」と云ひ。更に「吾人は吾人の周圍に於て、神法及び人法の羈絆を脱せんとする潮流の澎湃たるを見る」と嘆して居る。

▲今に始めぬ事ながら、教會と社會黨との仲の悪さ、犬猿も雷ならずとは是等のとをいふのであらう。

院内齋松典哉新、清陰十丈絶繼塵。
慈親享壽正華甲、同占無量永劫春。
爲文學士常盤大定君賀岳父嚴界

翁 華 甲 明 獄 有 馬 祐 政

▲今年は多數民衆の困難した年であつた。而して教會は之に對して、何處に於て何等の救済を與へたか。今年は勞働欠亡の年であつた。而して教會は之が防止に努めることはさて措いて、その事實の存在をだに、認めやうとしないではないか。吾人は恐るべき物價の騰貴に遭遇した。今も尙現に遭遇しつゝある。然り而して教會側に於ては、嘗て基督の爲したりしが如く、立て其の騰貴を惹起せる張本人を罵る者もないではないが、吾人は全世界環視の中に立つて麵麩の爲めに闘つた(關稅案通過のこと)をいふと、而るに教會は此の戰闘を冷眼視して、一人の立て議會に於ける少數者、而も實際國民の大多數を代表する少數者に應援せんとする者もないではないか。否、嘗に然する者のないのみではない、麵麩の代價を騰貴せしめ、貧民の膏血を絞つて、暴利を貪らんとする者に味方した輩は、常に會堂内に於て幅を利かす徒である。加之、其の一分は嘗て基督が説き且つ行ひたる愛の説教者である、教師である。彼等は今日も定めて講座の上に立て愛に就て説くことであらうが、吾人の見るべき眼を以て見、聞くべき耳を以て聞くときは、夫の説教は、吾人の耳には滑稽諧謔としか響かぬのである。而して降誕祭の鐘の聲が吾人の心に響き、吾人の心を打つときは、徒らに吾人の憤慨、不平の念を呼び起すに過ぎない、吾人は夫の口に愛を説き、之を事に現はさる輩とは、到底手を携へて事を共にするとは出来ないのでは

雜 録

印度の無聊

印度帝國内パナライチ村驛舎にて

泥 佛

實に奇遇ではありませんか、僕等が印度の而もこんな野蠻極まる處で一所に年を越さうとは、而して兎角目先の變つた新年でして、これ併あり屠蘇あり歌留多があれば大に面白のであるが、さう甘くは行かないので、僕等の此村に來たのは丁度暮の十二月廿六日である。

一月一日の此村で催される、印度皇帝陛下の戴冠式祝賀會へ特別來賓として出かけた、▲泥佛は羽織袴で日本の正服を着た若様は此方で御座ると大威張り、▲啞云は燕尾服を着けて歐亞の山川を破踏した「ハイカラ」式日本紳士は乃公である大得意、而して此祝賀會の委曲は、番町の不合理俱樂部の方へ通信致しおきたれば就て御覽を願ひたい。

扱をそれまではよかつたが、今日此頃の有様をいへば(中略)世の中に辛ひ事が澤山あるが、其中何が一番つらうと云つて、僕等の今日の境遇が一番つらいと答へる、其故は自分等の目的は立つて居ながら、其目的を達する手段がどうしても出來

ない、いやあらゆる手段を盡したが、さつぱり手筈がない、郵便を送くつても、電信を打ても、少しも返事がない、返事がなければ旅行券を得られぬ、旅行券がなければ「ニポール」へ入込めぬ、「ニポール」へ入り込めぬば、目的地を捜す事が出来ない、捜す事が出来なければ、何時までたつても舍衛城も、祇園精舎も、給孤獨園も見出す事が出来ない。

同一驛舎(宿屋の事)の同一室の、同一机に倚る親友二名、泥佛と啞云と、暫時無言、色青ざめ眼落ち込むとまでは行かぬが、目下意氣大に消沈、フト兩人の視線の行き逢ふ時、啞云は叫びながら曰く嗚呼をしても一度は葱嶺山頂に鉄腕を揮い、「バミール」高原に長嘯せし大の男である、然るに無聊に困めらるゝといふよりは、むしろ無聊に攻め亡ぼさるゝといふは何といふなげない事であらうと、▲泥佛は忿然蹶起、釋尊の端座六年を回想せよと慰む、而も直に元の凡夫に還へる、時に或は禮讓も何も知らぬ亡國の民がやつて来る、先達の日本服をよく見せて呉れとか、或は日本には毎日地震があるから、人が自然と死を恐るゝなくなる、隨て戦に強いのであらうなどといふ、▲啞云は我々獨立國の臣民はなど熱を吹き、泥佛は「フーム」と呻る、又次のがくる、白眼む、吹く、逃げてかへる、外へ出て白象に跨がる、猿と鬼ゴッコをする、栗鼠と「カクレンボ」をする、それも毎々だから厭る、内へはいる、日本の新聞雑誌は、藥屋の廣告でも、何んでも、

海師には伽耶にて逢はれたさうだ。

園田氏は單獨にて「パンジャブ」巡回中、僕等は前記の通り、兩人共少々「ボケ」の氣味合なれど食事丈は一人で二人前づ、ヤツテノケルは例の如くなれば滅多に往生は不仕幸には安堵あれ。

御許様には遠に彌陀の御手許に御引取にあづかるべき筈を、今迄ながらへて業恥さらす御身の上、海嘯で荷物をヤラシタ位は、別に御見舞を申上ぐるにも及ぶまいて、呵々。退屈まされに、こんな事を書いて見た、欠伸を殺す材料とならば意外の幸である。

亂筆は御互の事として、是非返事を願ひたい、ねもしろい手紙をくれなにと、閻魔様に云ひつけますよ、さよなら。
右は海を湘南の静境に養ひつゝある、某夫人の許に寄せ來りたる印度通信の一部分なり、泥佛、啞云二氏の無聊思ひやらるゝなり、掲げてわが讀者諸君の無聊に供ふと云爾。
記 者 識

三種の人

和田 鼎

世に三種の人がある、一は無信仰の人、一は信仰を得んとして切に其道を求めつゝある人、一は確乎たる信仰を得て居る人即ち是である、何人も皆知る如く現代の日本は過渡の時代に屬し、舊信仰舊道徳の基礎が破れて未だ之に代るべき新

隅から隅まで一字も残さずに讀む。

そこで今日は、兩人共知己の小田原の隠居の處へ手紙をやらうじやないかと相談をした、一筆啓上火の要領もあまり氣がきかないから、何かいふてやらうや、僕もかく、僕も一所になどといふて、駄句をこしらへて見た、句になるとならぬとは僕等の關する處に非ずさ、最もこしらへ事ではない、實際の景色である。

象の聲窓の「ガラス」にびびきけり。
黒光りする人月に嘯けり。
白人の馬車馬太く土人瘦す。

腰折れ
猿のむれ 山羊のむれまた 栗鼠の群 虚空はるかに鶯の一ひれ。
虎哮けり 象嘯けり 獅子咆けり庭のかたへにコブラ(毒蛇)ぬたくる。

藤井兄には僕はまた面會せず、残念の至り、と一人がいへば、それは「センショ」(宣正)よりの約束とあきらめ給へと一人が慰む。

園田はんは髻をはやサハツテ、イカウ、えらさうにナラハツタナリ、と一人が京都辨を弄すれば、ホンマにソエ(宗惠)と一人が相槌を打つアハ……(中略)藤井兄は某々等と一隊を形成して今王舎城に在り頗る強健の由にて團了師や慧

信仰新道徳の樹立せられざる時代であり、且つ十九世紀の物質的文明が旺盛を極めた結果として、滔々世人をして皆無信仰の悲むへき落穴に陥れられたのである、從て第一種に屬すべき無信仰の人か極めて多い、殊に今の中老株の人即ち今の社會に立て其富と其位との上に優勢を占めて居る人々にこの種の憐むへき人か多い、夫以上の年輩の人になるとさすがに舊いながらも何等かの信仰を有して居る、又夫より以下の年輩の者即ち壯年の者若くは青年者に至つては、一方に是等の無信仰者の爲すところに嫌焉たる者か多くあるのと、一はあまりに物質的に傾いた反動として、自覺の念が漸く萌しかけて居る、殊に青年の間に於てこの傾向の著しいのは、最も欣すべき現象といはねばならぬ、今廿世紀はもはや物質旺盛の時代は去つて精神的の時代に移るへきは毫も疑を容れぬ事である、廿世紀間の主なる問題は必らずや宗教問題若くは倫理問題に傾注さるべき傾向は世界の各方面に著しく現はれて居る。

無信仰の人か國家社會の上に優勢を占めて居る、現代の日本の有様は何といふ狂態であるか、一々に之を指摘する迄もない、日本の社會の主要なる部分は腐敗靡亂の極に達して居るではないか、無信仰の人は丁度砂上に築いた建築物の夫の如くその爲すところに一つも根底がない、暴風一過すれば正に粉微塵となつて飛散するのである、若くは大風の時に灰を

撒いた様なもので東から吹けば東に飛び、西から吹けば西に舞ひ、一定の方針は更に立たぬのである、斯の如き人々か國家社會を左右するのであるから今日の如き上づつた状態にあるのである、一度眼を青史に照らして古今東西の諸國民が興廢の跡を尋ねて見よ、無信仰の人々か國家社會の要路に立つて、國政を左右した時代は必らずや國家社會の腐敗墮落を招いて居る、吾國に於ける南北朝の末葉の如き、支那に於ける東晉の末葉の如き、西洋に於ける中世末紀の如き殊に從來信仰の泉源であつた羅馬法王の墜落して佛のアニモンに移つて居た時代の如き、等しく皆國家社會の敗腐墮落を極めた時代で、また無信仰の人々が社會の上流を占めて居た時代である、世に最も恐るべきはベストでない、露國でもない、地震でもない、一に國民の無信仰といふことである。

無信仰の人は一方に必らず懷疑の人である、懷疑の人であるかゆえにまた何事でも自己の利益の爲めには善惡の如何を問はぬ人である、其日其日の風次第にドウテモ豹變する人である、從て人生の意義は抑も何であるかについて少しも自覺の無い人である、かくて一生を醉生夢死する人である、斯の如き人は眞に憐むべきものではないか、斯の如き哀むべき厭ふべき人は一人たりとも其教を滅することを望まざるを得ない、彼等の人々には信仰によりて得らるべき安慰と希望と、更に大に欣ずべき敬虔なる至誠の念とは、毫も見ることが得

ぬのである、之に反して彼等は常に不安で、猜疑で、嫉妬で、權謀で一度之に接すると言ふ可らざる不快の念を生ずるのである、故に吾人はまづ人道の大敵として是等の無信仰者を攻めて早く信仰の間に入らしめねばならぬ。

人に信仰の欠く可らざるを自覺し、如何にもして眞面目に信仰を得んと求むるの人は中年以上の人には見出し難い、却て青年有爲の人々に多い、この傾向は近時著しく増進し來つて、中には大に心的苦悶をなしつゝ、赤裸々のまゝて宗教の門戸を叩く人がある、是は確かに宗教的自覺に一步を進めた人であつて、今日の社會の有様にあきれ果てた結果社會上に於ける諸種の欠陥に驚いて、己人としてまた國民として之に確かなる信仰を得んともかくものである、是等の人は必らずや、早晚之を握ることを得て信仰の人と成るに相違ない、しかし是等の人々と雖ともやはり時代の子であるからして、是迄淺薄なる科學などの力で信仰を破壊されて、頭か兎角理性勝になつて居るからして、自己の有する智識を初め凡てを擲つて苦悶の餘直ちに佛の慈光に接することか頗る六ヶしい様である、然し一度疑ひの門に入つたものは早晚解脱の門より出づる期があるに相違ない、這種の人は一面より見れば確かに苦悶の人である、之を無信仰の人にしては苦しみの状態にある人である、が、又一方より見れば光明の途に一步を進めた人で、醉生夢死の哀むべき状態を脱して意義ある生活の門

出を爲した勇者である、進んで止まずんば道は必らず得らるのである、吾人はこの種の人々か近時非常に増加し、殊に之が青年有爲の人即ち將來の國家社會を形成する人々であるのを見て將來に一道の光明を認むるのである。

確手たる信仰を把持して一舉一動皆悉く其の信仰より割出し、山壞るゝも動せず、川決するも搖かざる底の信仰者に至りては悲哉最も少數である、吾人は信仰者の行動を見て如何に其平和に如何に其勇氣に富み、如何に其敬虔の情に厚きやを見て、欣慕措く能はざるものがある、是等の人に接するとき、吾人は春風徐動して面を甜むるか如きの思がある、斯の如き人か國家社會の主要なる位置に立つて國民を指導する時代は國威の最も盛んに且最純潔なる世である、斯く思ふ時、吾人は常に北條時頼の治下に於ける鎌倉時代を想起するものである、西歐十六世紀の初葉に於ける獨乙の有様を思ひ浮べるのである、吾人は信仰を得んとして求めつゝある間にも、常に信仰者の欣慕すべき行動云爲を見て少からず感化に浴する事が出来る、吾人は這種の人のモデルとして吾人に親しき蓮如上人の言に見よう、如何に信仰の人が歡喜の思溢るゝ斗りなりしやは『うれしさを昔は袖につゝみけり、今宵は身にも餘りぬるかな』の詠にて充分にあらはれて居る、又其如何に敬虔の情に厚かりしやは『たとひあさなきさすとも佛法の御用と心得べし』といふによりても明了である、かゝる心地に

住した上人の心中は如何にゆたかであつたかと思ふ、又如何に自己を省みるといふことに注意せられたかは『行ささむかい斗り見て足もとを見ねばふみかふるべきなり、人の上ばかり見て我身の上のことをたしなまずば一大事たるべきことなり』この言葉でわかる、道に進むの門戸は嚴密に自己を省するより初まるのである、又其の傳道に精進であつたことは『蓮如上人細々御兄弟衆等に御足を見せし御草鞋の緒くひ入きらりと御入候、かように京田舎御自身は御辛勞にて佛法を仰さかされ候、といふによりてもわかる、又如何に足るを知りて勤儉力行の人であつたかは『前々住上人仰せられ候、家を造候とも頭たにぬれすは何ともかとも作るべし、萬事過分なる事を御嫌候衣裳等に至るまでもよきもの着んと思ふはあさましき事なり冥加を存したる佛法を心にかけよと仰せられ候』と吾人この訓誡をきいて眞に愧死の思がある、この外一々擧げ來らば一言一句皆吾人に對する貴重なる教である、吾人はこの信仰の人の欣すべき心の状態を見て我も又かくあらんといふ心を起し、常に信仰の人の言動の跡を思ひ浮べるといふことは、六ヶ敷い理窟をいふてをよりは遙かに心の養になら、それは即ち感化であると思ふ。

三種の人、その中第一の人と雖とも可成信仰の門に入らしめたい、第二の人は一度道に志した以上は勇猛精進して光明の門に入らしめたい、かくて一人たりとも信仰の人が出来る

ならば、社會萬般の改良は手を下さずして了ることか出来
る。夫造は百の會が興ろうか千の黨が結ばれようが、問題の
解決は出来ぬ、而して吾人が第二種の人に勸めるのは信仰の
人に近づくの一事である、之を今に求めて得ざれば去つて過
去に求むべし。求めんとする者の眼には凡て皆教訓なりであ
る。

予の幼時

小 魔 生

予は幼時極めて臆病者であつた、夕日西の山の端にくれり、蟬鳴か得意氣
に遊す暗き軒下を飛び廻りて最早咫尺を辨せぬやうになり、次第に晝の暮
閉ぢやうとする時は、大きな夜遊することは先づ稀であつた、たとへば夜分外出す
る時あつても必ず友人同志に送つて貰ふた、余の家は周囲は幾百年を以て経たる
老杉古松蔭として天を掩ふて霞尚暗きの感がある、夜は一しほ凄氣を帯びて薄身
震慄を禁じ得なかつた、何物かは知らぬが千斤の重みを以て頭より押へ付らるゝ
氣味が數々起つて、一種云ふに云はれぬ恐怖心が湧き起つた、殊にいやな鼻の、予
暗聲がたびくきこえていさ此上もなき恐怖心に打たれた、今でも尙記憶して居
るが十二三歳の時暮れ行く秋の淋しき一夜、隣村より吾の家を指して來る時、無我
夢中で奔りつゝけて歸りつた事の、今から思へば笑止千萬の限りである、予は何で
こんな臆病であつたらふ、其くも晝は極めて臆病でいつも鬼火大將で威張
ちらしたが、夜分になると猫に追はれた鼠の如く片隅に小さく息を殺して居つた、
家庭に於ては人並に教育されて居りながら、むやみに臆病風に襲はるるは自分が
自分で想像が出来ぬ、そして其恐るべき怪物の對象は何物であつたらふ！ 狐狸
があらす、幽霊があらす、狐狸も恐しい、幽霊も恐しい、が、狐狸に就ては何とも
意に留めなかつた、正体見た事もない幽霊に就いては夢ろ人から話をきいてさへ
身ぶるいが生じた、實に不思議な事だらう、予は十六七歳の時幽霊へ出るこ
じなつた、而も恐怖心が依然として元のまゝであつた、ある冬の夜外出したが、

大塚の別天地

(東京市養育院參觀記)

安 藤 正 純

◎平安なる生活といふことは幾様にも解釋が出来るなり、織
らず、耕さず、闘がず、想はずして衣食住の三を完うするを
以て平安なる生活とせば、平安なる生活なるもの程世につま
らなきものはなし、我はよし食はずして死するともかゝる生
活をしたくなし。

◎競争の上生存し、優勝劣敗の活動をなす間に生活の趣味
は存するなり、而かも順に得て驕らず、逆に失て驚かず、從
容として運らざるもの、これを眞の平安なる生活といふ、然
るに世には前者の趣味を以てせる平安なる生活を爲すもの存
せり、而して我は之を目撃したり、應憐れなる東京市養育院
内の廢人等よ。

◎私の養育院を參觀せしは二月二十三日、天麗かに風軟かき
春様模の日なりき、幾十の顔色悪るき廢人、老人等は何等の
備付もなき無趣味極まる長細き三四十疊の廣間に、アチラに
一團、コチに一群、サニたる話もなく何れも茫然自失せるが
如き顔もて集れり、尋常の家の老人ならんには、孫の手を引
きて探梅、散策と出かくるところならんに、さても憐れなる
人々よと、先づ胸を打ちぬ。

◎クサミ、堪えがたき臭氣は鼻を撲てり、我を導きし安達幹
事は窓を開けよと命ぜり、直に起て四五ヶ所の窓を開きし一
老人、向き直て幹事を見、淋みしき笑みを漏らせるなど、何
等不愠の心根ぞ、參觀せる我れにまで心配りて、眼を轉じて
辭儀を施すに至ては一層快からぬ思を爲せり。

◎幼児室に伴はれぬ、児童は既に幼稚園の日課を終へて歸室
せり、八十餘の男女の幼児は蟻の如くに蠢めけり、我等の來
れるを見て一齊に視線を向けぬ、其内人ナツコイ五六兒は安
達氏を見て『幹事サン』『幹事サン』と五月蠅さまで取纏り、
中には『オヂサン』と呼び、直に改めて『幹事サン』と言ふもの
あり、羽織の紐をイヂル兒、袂をヒツバル兒、菓子と與へ
んとて持ち來る子、拂へども直に取り付くこと宛かも飯の上

の蠅の如し、如何に安達氏が温顔常に兒童に接し彼等に懐つ
かるゝかを知るに足らん、只未だ物の理をわきまへざる頑是
なき幼児が『オトツサン』といふ甘たるき言葉を出すに由なく
僅に『幹事サン』の一言が天にも地にも懐つかしき慕はしき唯
一人なるを思ふて座ろに暗涙に袖を濡したり。

◎裁縫教場に至らんとして途に一海老茶式部に遇ふ、年十八
九、容貌また醜からず、何科かの教師かと思ひて之を安達氏
に問ふに、否、これ本院にて養ひし一人にて、目今教員傳習
所に通學するものなりと、氏の語に曰く此の外目下職業學校
に通ふ女子二人、下田氏の工藝學校に通ふ女子一人、男子に
も職工學校に通ふもの三人あり中には成績良好にて小學教師
の妻となれるものありと、養育院もかゝる方面を見れば何と
なく楽しく勇しき心地のせらる。

◎仕事場の内指物工場、上草履製造場、状袋製造場、造華室
等に在て業に従ふものは皆一と廉の腕を有し出院するとも差
支なく生活し得らるゝもの、如し、腕も十分となり、貯蓄も
出来ればそれゝ道をつけて外に出すなりといふ。

◎裁縫場には十一二より十六七に至る女兒、二三十人集まり
て二三人の教師を取りまき居れり、中にはみめ善く、態度も
しどやかなるがあり、時々は嫁にとの望み手もある由、現に
我れの觀覽を終て應接室に話せる時、五十二三の被布を纏
へる上品なる老婦人の、十六七の嫁が欲しいとて懇望し來れ

るがあたり。○學校は尋常小學にて教室の工合頗る完備し幼稚園之に附屬せり、一教室にて十二三の男兒机に倚りて何事をかなせり、安達氏時間外に何故にこの處に來り居るやと問ひければ、教員の許しを受けて今手紙をかく處なりと答へぬ。

○少しく離れて感化部あり、目下こゝに收容するもの三十七人ありと、褥、カッパライなどの仲間に入りし悪性の兒童を收容するなり、室の廣き割合には收容者少く、四隣又静閑なり、

○家庭教場なるものあり別に一戸を爲せり、女兒に炊事を教ゆるところなり、日々十人の收容者に二人の教員付き添ひて御客に趣き、以て實地の練習を爲さしむといふ。

▲房州に保養所を設けあり、幼少年にして身體の羸弱なるものを送るところとす、我が參觀の前日にも四十人歸院せりとすの事なり。

▲病室はたとひ高貴の人のものと雖も、餘り心地善きものにてはなし、況んや養育院の病室を見るに於ておや、殊に三つ四つの小兒が病に苦しめられ、見ず知らずの襟袖に介抱せらるゝを見ては誰れか一掬の涙なきを得んや。

▲愉快に近き五つ六つの男兒四五人、病床を離れて板の間を遊び居れり、我等の廻り行けるを見て、丁寧に辭儀せり、中に一人兩手を丸める眞似をして『オマンデユウ』とつぶよ

閑文字

○東京の緑日、神や佛の毎月日を定めて賑合ふ緑日は如何程あるか云ふに、或閑人の調べに依ると一ヶ月に三百四十餘ヶ所あることと、もとより此内には一ヶ月の内二度三度の緑日のも有らふ、併し祭禮杯で賑合ふ特別のものは勘定に入れてないとのことである。

○うして一ヶ月の内一度に緑日の多いは二十四日二十ヶ所もあるが、三十一日には一ヶ所もない。

○舊幕時代には如何程の緑日があつたか云ふに、凡う百四五十ヶ所まで今日よりは少ない、此内で二十餘ヶ所云ふものは大名の下屋敷にあつて、緑日に限つて参詣人を入れたものである。

○神佛でも時世に應じて盛衰のあるもので、昔は盛であつたが今は一向に参詣なく忘れられたのも少なくない、殊に痘の神様や痘疹の神様は醫術の進歩と共に願われなくなつた、今も昔も相変わらず盛であるは神様では、稻荷、金毘羅、水天宮、佛壇では薬師、不動、大師と云ふ様な何ても願が契ふと云ふ方だ。

○法然上人や親鸞上人は緑日の佛として引出さるゝ様な資格の人でないが、珍らしいことには日本橋に圓光、見取兩大師の緑日と云ふがある、兎角現世利益がなくてはならぬが何う云ふ願が契ふと云ふ居るの知らん。

○痘や痘疹の神様の緑日が無くなつたに却て舊幕時代より緑日の数が多くなつたは一寸異なれば、之は東京の人口が増加して來たのと、大名屋敷が無くなつて新聞の町が出来、土地を繁華にする爲緑日を造くるからである。

○神佛でも流行する様にするには色々の政界があるもので、虎の門の水天宮は久留米藩の屋敷にあるが、始めうの藩主が大變に華美が好きで参詣に來たものには金を與へまた商人の菓子を一手に買つて参詣人に之を與へたうである、それが爲め水天宮は非常に盛になつた。

○緑日商人なる商店商業のみならず一種の部落ある、緑日物なる下等商品もある、此等商人の生活状態、下等商品製造の模範を語らば随分面白いこともあるが之は他日の材料とせやう。

のあり、何事ならんかと思ひしに、先刻大なる饅頭を與へし嬉しさに喜んで吹聴するならんといふ、襟袖の説明をきいて座を憐れを催し、長く居るに堪えずなりぬ。

▲門を入て左側に別に會堂の設けあり、佛教各宗の寄附にかゝる、毎月二十日本院死亡者の追吊法要を營み且つ高僧を聘して四恩瓜生會を開く、各宗の青年特志者亦來て法を説き心を慰む而かも收容者の喜んで教を聞かんとするものに乏しといふは遺憾限りなし、斯かる穢らず、耕さず、鬻かず、想はざる平安の生活者をして、せめては前途一縷の光明を見るに至らしめんことは世の佛の道を踏み行く人々の務ならん、精神主義などいふ人はかゝるところに來て何故に道を傳へざるやと思ひぬ。

▲離隔室四棟あり、癩病患者室、肺結核患者室白痴並に啞者室及び初入院者室なり、白痴並に啞者は名ばかり、室の前の仕事場にて、一心にタドンを丸め居たるを見たり、世に謂ふ啞者は伶俐なりと、言ふ可くして愚かなる者と、伶俐にして言ふ能はざるものとの其の意ふ所を聞かまほしく思ひぬ。

▲東京市養育院、小石川大塚辻町にあり、敷地一萬三千餘坪家屋千七百五十坪、院長澁澤榮一幹事安達憲忠、院の濫賜、今を距る百餘年白川樂翁公に發せりと云ふ。

講 究

労働者保護法 (六)

池山 榮吉

▲賃賃の支拂

○賃賃の支拂に關する方法を、全く當事者の自由に一任するときは、勢ひ、労働者の不利を醸すこと屢なるより、特に労働者の保護に關する規定を設けて居る諸國では、此點に關しても、亦多少の規定を設けて居るところが多い。

○獨逸 營業者は賃賃の支拂を爲すには現金で帝國の通貨を以てするを要する。又營業者は労働者に物品を貸與してはならないとなつて居るが、併し労働者に元價で食料品を給し、家屋若くは土地を、當該地方に於ける通常の家賃若くは地代を以て貸與し、燃料、燈火、賄、藥、醫療、併びに當該労働者の労働に要する器具及び材料を元價で給して、是等の代價を賃賃支拂の際、其の中より差引くとは構はない。

▲右の規定に違背したる場合には、營業者は管に所罰せらるゝのみならず(二千マルク以下の罰金、又は六月以下の禁錮)労働者より重ねて賃賃の支拂の請求に遇ふときは、之に應ずるの義務がある、即、營業者が現金で通貨を以て支拂はず、

又は貸與したる物品の代價を勞賃の中より差引きたるときは、勞働者は、苟も其の請求が時効に係らざる限は、再び勞賃の現金拂を請求する事が出来るので、營業者は、既に代物を以て辨済したりとの理由を以て、其の請求を拒む譯に行かない、此場合に於ては、勞働者が前に代物辨済として請取りたる物は、現に尙ほ其利益の存する限度に於て、其の勞働者の所屬して居る補助金庫の有に歸し、若し斯る金庫なきときは、當該地方に於ける、勞働者の利益を目的とする他の金庫、若し又其の金庫もなきときは、當該地方の救貧金庫の有に歸する事となつて居る。

▲勞働者の需用品を、一定の賣捌店にて購買すべき旨の、勞働者と營業者との契約、併びに勞賃を、勞働者若しくは其の家族の利益を計る制度に参加する爲めの外、他の目的に供すべき旨の、勞働者と營業者との契約は無効である。

▲營業者は料理店、酒店、賣捌店にて勞賃を支拂ふことを禁ぜられて居る。蓋し勞働者が後の分別もなく、直ぐ其場で勞賃の幾分を消費する弊を慮つてのことである。

▲營業者は、勞働者が所定の勞働を爲し終り、且つ勞賃の支拂期日が経過した後でなければ、其の勞賃を第三者、即、勞働者の債権を譲受けたる者、若しくは勞働者に代位して、其の債権を取立てる權ある者に支拂ふを禁ぜられて居る。而して勞働者の債権者も、亦右勞賃の支拂期日経過後でなければ、

▲以上の規定は、鑛山、石坑、製鹽場等にも適用される。又工場作事場以外に於て、營業者の爲め製造に従事する勞働者にも適用される。併し、商業に従事する徒弟及び使用人には、適用されない。

◎英吉利 勞賃の支拂は通貨を以てしなければならない。之に違背する契約、若しくは支拂は無効である。

▲勞賃の請求に對しては、僱主は反對請求を爲すことが出来ないのが原則であるが、左の請求に就ては、僱主は勞働者に對して、或は支拂を請求し、或は勞賃から其の請求額を差引くことが出来る。

- 一、契約上の罰金
- 二、粗惡の仕事又は材料、其他僱主の所有物の損害より生ずる賠償
- 三、材料、器具、機械、工場、其他勞働に必要な物の使用に對する請求
- 四、僱主より勞働者に爲したる一定の給付(例へば醫藥、燃料等)

▲前項第一號乃至第三號に掲げたる請求は、事情に相應なる額を超過してはならないといふことになつて居る。且つ其の請求に就ては、豫め書面上の契約を取結んで置くことが必要である。而して若し勞働者をして、一々其の契約に署名せしめなさいときは、契約の文言を常に見易き箇所に掲示して置かな

勞賃を差押へるとが出来ないことになつて居る。

▲雇傭契約の不法の解除に由る損害、又は違約の場合を豫想して定めたる賠償の擔保として、勞賃を留保することは、或る制限の下に許されて居る。即、此目的の爲め勞賃を留保するときは、毎回多くとも勞賃の四分の一を超過するを得ず、而して其の總額は平均一週間の勞賃を超過するを得ずといふことになつて居る。

▲營業者又は勞働者の一方が違約して、雇傭關係を解除したるときは、他の一方は、實際の損害を證明せずして、解除の日より、契約上又は法律上、雇傭關係の存續すべき日に至る迄の勞賃を、賠償として請求することが出来る。但し其額は當該地方に於ける、平均一週間の勞賃を以て限りとする。

併し此の規定は、勞働者の數二十人以下の工場にのみ適用されるので、夫れ以上の工場に就ては、特に違約賠償金の契約がなければ同様の關係を生じない。而して其賠償金額は、矢張一週間の勞賃を以て最高限としてある。

▲地方團體は、其の規則を以て、勞賃の支拂を遅くとも一ヶ月以下、速くとも一週間以上の範圍内に於て、一定の期間に於て爲すべきことを定めることが出来る。未成年の勞働者の勞賃支拂に就て、地方團體の定め得べき、營業者と勞働者の父母及び後見人との關係は、既に幼年勞働者の保護の題下に説明して置いた通りである。

ければならぬ。而して罰金(一號)は僱主に損害を及ぼし、若しくは作業の妨害を來す行爲に限り之を課するを得べく、賠償(二號)は實際の損害額を超過するを得ず、請求(三號)は元價を以て計算すべしといふことが特に規定してある。

▲規定に反する行爲(違法の契約、支拂、差引)は之を罰するのみならず、勞働者は其の支拂ひたる、若しくは差引かれたる額を六ヶ月内に於て取戻すことが出来る。但し勞働者が承諾を與へた場合には、單に相當額を超越する分のみを取戻せなさい。

▲勞働者をして、其の勞賃を一定の場所、若しくは一定の方法に於て支出せしめんとする契約は無効である。又勞賃を酒店料理等に於て支拂ふことは禁じてある。又勞賃の差押は、或る條件の下に禁じてあつて、而も勞賃の請求には破産(僱主の)の場合に於て優先權を附與してある。

▲以上の規定は各種の力役勞働者(工場勞働者、農業勞働者、鑛山業勞働者等)に通じて行はれ、契約上の罰金の規定は商店の使用人にも適用される。

◎奧太利 奧太利にも、大体獨逸と同じやうな規定がある。即、營業者は現金を以て勞賃を支拂はなければならぬのが原則で、例外として、豫め約束して、家賃、地代及び器具、材料、燃料、醫藥、醫療の代を勞賃の中に加算することが出来る。又食料品若しくは賄を元價を以て勞賃中に加算すること

を約束するとも出来る。之に反して爾餘の物品を一時労働者に貸與して、其の代を勞賃の中から差引くことは禁じてある。それから、勞賃を酒店等に於て支拂ふことも、又労働者をして其の需用品を一定の賣捌所に於て購置せしむることも禁じてある。勞賃を第三者に支拂ふこと、並びに勞賃の差押に關しても、矢張獨逸と同様の規定がある。

▲前述の規定に反する契約は總て無効であつて、勞賃に對する代物辨濟は、尙ほ労働者の更に勞賃を請求するを妨げないで、労働者が代物辨濟として受取りたる物は、勞賃請求の當時、現に尙ほ利益の存する程度に於て、病者保護資金、若くは救貧資金に歸屬することゝなつて居る。

◎露西亞 通貨の代りに、物品で勞賃を支拂ふことは禁じてある。前貸、賄、又は必要なる使用品の給付に關する請求を除き、労働者の債務を勞賃中より差引くことも禁じてある。又備主が労働者に與へたる貸金の利子を請求し、若くは労働者の債務の保證を引受けたる報酬を請求することも禁じてある。而して醫療、作業物の燈火、労働に要する器物使用の料金を、労働者に對して請求することも禁じてある。

▲備主は労働者に對して、(一)粗惡の仕事、(二)過意、(三)秩序の妨害の場合に課すべき罰金を定めることが出来る。罰金を課すべき場合は、其の金額を明示して特別の表に記載し、工場監督官の認許を経て、作業場に掲示して置かなければならぬ。

多くの争の根を絶ち、兩者間の平和を維持する上に少からず與つて力あることを思へば、法律上勞働規程の設定を命ずることの至當なるを知ることが出来る。

●獨逸 二十名以上の労働者を使役する工場には、是非とも勞働規程を設けて置かなければならぬ。勞働規定は作業の部類、労働者の種類に從て其の内容を異にすることが出来る。▲勞働規程は、總ての關係労働者に見え得べき、適當の箇所に掲示して置き、且つ常に讀み得べき様にして置かなければならぬ。

▲左の事項は是非勞働規程中に定めて置かなければならぬものである。

- 一、労働及び休憩時間の終始
- 二、計算及び勞賃支拂の時期及び方法
- 三、法定の準則に據らざるときは、解約豫告の期間、及び豫告を待たずして解約し得べき理由
- 四、罰を定むるときは、其の種類及び程度、決定の方法、而して若し其の罰が金錢なるときは、其の取立及び使用の目的
- 五、違約賠償金を約したるときは(勞賃支拂の部參看)其の賠償金の使途

▲右の外、備主は尙ほ作業の規律、及び作業中労働者の探るべき態度に就て規程を設けることが出来る。それから又、勞

ならぬ。罰金額は、通常の勞賃支拂期間毎に交附する勞賃の三分の一を超過してはならぬといふことになつて居る。

▲期間の定めある雇傭契約に在ては其の期間の経過前、期間の定めなき雇傭契約に在ては告知後二週間前に於て、備主は約束の勞賃額を減ずることを得ず、労働者も亦約束の條件の變更を要求する權を有たない。

▲一ヶ月以上の期間の定めある雇傭契約に在ては、少くとも一ヶ月に一度、期間の定めなき雇傭契約に在ては、少くとも一ヶ月に二度、勞賃の支拂を爲すべきことになつて居る。

◎北米合衆國では、中三十四の邦國で、勞賃の支拂に關し、其の手段、方法、時期等に就て規定して居る。白耳義でも規定して居る。又、佛蘭西でも多少の規定を設けて居るが、今は之を畧することゝしやう。

▲勞働規程

●勞働規程は、稍大なる作業に在ては、當事者の權務を明確にし、作業の規律を維持する爲めに極めて必要のものである。獨逸の該事項を規定せる箇條の理由書に曰く、勞働規程は二様の目的を有するもので、一には、備主が労働者に提供する條件を豫定する。從て勞働契約の成立を容易にする。次には、作業の技術的及び經濟的規律の維持に關する規程を設け、罰則を定めて其の履行を確保する。労働者の權義を明かに知らしむるは、その不明なるより生ずる備主、労働者間の

労働者常住委員の承諾を経て、労働者の利益を目的とし、當該工場と關聯せる制度に關して労働者の探るべき態度、及び未成年労働者の作業以外に於ける行狀に就て規程を設けることが出来る。

▲榮譽の感情を侵し、若くは善良の風俗を害する罰則は、之を勞働規程中に定めるを許さない、罰金は、原則として平均一日の勞賃の半、特に法律に定めたる場合に於ては、一日の勞賃全部を越ゆるを許さない。而して總て罰金は當該工場労働者一般の利益に使用すべきものと定められてある。

▲勞働規程は法律に違反せざるなり、備主、労働者雙方を拘束する。勞働規程の新設、改正、追加は早くとも二週間後でなければ效力を生じないとなつて居る。

●奧太利 二十人以上の労働者を使役する作業場には、勞働規程を設けて公示しなければならぬ。左の事項は必ず勞働規定中に定むべきものである。

- 一、労働者の種類、婦人及び幼年労働者の使役方法
- 二、幼年労働者の法定の學校教育を受くべき方法
- 三、労働及び休憩時間の終始、併びに労働日
- 四、計算及び勞賃支拂の時期
- 五、監督者の權利義務
- 六、労働者の病氣に罹り、若くは怪我したる時の待遇方法
- 七、違約賠償金及び其の使用方法、併びに其他勞賃差引の

場合、
 八、解約豫告期間、及び即時解約し得べき場合
 ▲鑛山業に於ても矢張労働規程を設くべきことになつて居る。
 ●爾餘の諸國でも、一定の事項に關して規程を設くべきことを命じて居るところもあるが、(例へば前掲労働賃の支拂の題下、英國及び露國の部參看)、縦し法律で命してなくても、稍々秩序ある大工場には、慣習上任意に労働規程を設けて居るものが多い。

報 道 一 束

●追々と庭の若草も萌えて、小川の水もゆるやかに流れ天麗に風輕くして野外の梅早や既に満開となり、覆郁たる香氣鼻を撲つ來り、誠に近郊吟杖を曳く好時節と相成候。

殿下
 元帥大勳位功二級小松宮彰仁親王殿下には、先頃より御腦病に罹らせられ候が、去る十八日午前三時と申すに瀟焉として薨去あらせ玉ひぬ、恐れ多くも上は 至尊陛下より、下は五千萬の吾々臣民に至るまで哀悼慟哭して惜かざる所に候、恭しく惟みれば殿下は金枝玉葉の御身を以て、夙に跡を桑門に寄せ玉ひしが、維新中興の際、御遺俗ありて戊辰の役征討大將軍に任じ、錦旗節刀を賜ひて向ふ所草木風靡せざるはなし、遂に鴻業を大成し給ひぬ、維新以後の御武勳に至りては世人の記憶に新たなる所なり、殿下の王室に御忠勤を擢てられ、御心を邦家の爲め潜め玉ひし

し、兩派の運動頗る激烈との事に候。
 ●求道學舎の第二回の信仰談話會は去月廿二日の講話後に催され候、出席者五十餘名にして、前回よりは趣味ある問題提出され、一同肅然として靈感に打たれ候心地致候。今後毎月最終の日曜日と以て催す事に定め候。其後の講題如左。
 願在の人、潜在の人(二月廿二日) 佐々木月樵
 信 樂(全上) 前田 靈雲

●讀賣新聞は東西兩京の大學と題して、兩者四邊の風物より説き起して、進んで總長の比較、教授連の比較等論ずる由に候、結局一場の空論に過ぎざるべしと云ふもの有之候。
 ●近角兄統率の下にある求道學舎の近況左に申上候
 ▲其人員 目下十二名にして國別にすれば、北海道(二名)青森(一名)秋田(一名)宮城縣(三名)茨城縣(一名)近江(一名)京都(一名)加賀(一名)伊勢(一名)等に候。
 ▲土曜會 毎月二回土曜日の晩をトして土曜會を催し、思ひの演説をなし、右終りて茶話會に移り種々なる遊戯法を行ひ、滑稽百出呵々大笑四隣を驚かし候、寧ろ土曜會よりは笑話會と名くるの適當かも知れず候、洵に餘念なく邪氣なき小集會に候、殊に去る廿八日の如きは浩々洞々人諸君を聘して、盛にイデメ候は少々氣の毒にて候ひき。
 ▲遠足 近頃探梅かた／＼遠足を催すべく候。
 ▲雜誌 の購讀會も起され、皆々自由の翼を伸ばして欣々然たる有様に候。

●近衛公、菊池大麓、上田萬年氏等の首唱にて濟美學校と云ふ、尋常、高等、中學校まで十一年間連續して、普通教育を

ことは、萬民のなかく仰望して止まざる所に候、一朝瀟焉として眠に就かせ玉ひたるは返す／＼も哀悼の限りに御座候、御年五十八歳に在し候ひき、越えて廿六日豊島ヶ岡に國葬し、各皇族を始めとして朝野の紳士、肅然徒歩靈柩を送り奉りぬ、滿都の風物慘として憂を帯びぬ、嗚呼哀哉。

●本月一日は總選舉了すると共に、大阪にては大博覽會開場せり、一は殺風景、一は春風和融の思ひ有之候。

●去月開會したる大谷會は出席者三十餘名にして、目下、井上南條氏等の老株不在なるを以て、大抵青年の人のみ出席せられ候演説を試みるもの、議論を闘はずもの雜然として起り、氣焰萬丈頗る盛會にて候。

●去月廿八日谷中眞宗中學にて、徳富蘇峰氏を聘して、講話をさゝたる由に候。

●大阪の基督教徒は、新市街築港附近或は諸國より來入の市民にして、未だ定まりたる檀那寺のなきものを教徒たらしむるは、他の人民を感化するよりも容易なるものあれば、今後大に此方面の布教に全力を濺がん計劃ありと云ふ、何時もながら機敏の事に候。

●世界第一の巨鐘と稱する、露國莫斯科府の梵鐘より高さこと七尺、重きこと一萬四千七百貫目、優に世界絶無を以て誇稱すべき、大阪四天王寺の頌徳鐘は鑄造の成績好良との由に候、是より鐘の周圍を掃除し隧道を穿ちて老幼婦女にも自在に鐘の傍に抵り得るの事にする由に候。

●昨冬火災に罹りたる京都の興正寺本山にては再建の議に就き、大阪に移轉説を唱ふるものありて僧俗の間感情衝突

通信の一節 (尾張より)

拜啓仕候餘未去り難く候處
 益御健勝爲法御盡力相成候段奉深謝候毎月御郵送に預り申候改教時報により活ける信仰の光明に照らされて曲りたる邪覺なる煩悩の胸を洗濯致居申候毎々御教示の通り今日の急務は各自の信仰上より願はれたる一歩／＼のまづめの進行に御座候毎週求道學舎の御講演時節稱適切なる趣味ある一大御計畫と密かに奉感謝候の御計畫に比すれば誠に若海の一滴申すもなごまき事なれども僻邑寒僧の事業として一昨年以來佛恩報謝の爲め御本書を繕き各町村内隣村の若男若女を集め講義説教開演仕居申候處其効果頗るはれ來り今日には毎席五六十名づつ、同行熱心に聽聞致矣申候事全く佛陀の冥祐の然らしむる所と歡喜罷在候當に眞佛土卷の中頭を講演仕居申候誠に御承知の通り淺學先識なる小子が愚父愚母を集めて信仰の談話をなさね難有きにまして求道學舎の御説教さうと奉深謝候小子初めの頃は自分各朝の事故參詣人も定めし来には怠慢して恐らくは無人の悲境に陥るならんと思ひ、心に痛仕居申候處今日迄千有餘回の講演に次第／＼にまじめに精進に聽聞致矣候事全く大師聖人の御恩徳の顯はれしこと奉深謝居申候來春迄には化身土卷結了の豫定に候へば來春より賞命の大經を拜讀して第一は小子信念の修養に供し兼て教人信の方を一をも實行致度今日より樂み居申候活んが爲に働くべからず働かんが爲めに働くべしとの御化導を蒙りながら漫問しや身の愛護に日夜猶餘念なきと如何にも慚愧の至に存奉候 早々 五、五、生

新 刊 紹 介

文學士 加藤玄智編
 Extrahle from eds Works of Eminent Orientalists.
 東京 大日本圖書株式會社發行
 題して東洋學者詩文抄と云ひ一二の兩巻より成る、其名の如く「マクス、ミュラー、リス、グロツプ、モドソン、アノルド」等東洋學者の著述中より中學上級の英語教科書に充てんが爲に面白く有益なる記事を抄出して兩博士の校閱を経たるものなり、從來の教科書の記事は多く西洋の事なるに反し、東洋に關する事、殊に佛敎に關する事多きは本書の特長と云ふべし、嘗て宗教敎科書編纂の必要を説く入ありし、本書の如きは此必要に應じて出てたるものとも見るべし、宗教敎科書に用ゐて恰好のものなり(一、二各二十二錢、郵税四錢)

三十八日
發行部

社 會 主 義

二 每
回 月

勞働世界は三月三日發行の社 會主義の如く改良されるべし

●社説欄には重に時事の評論と記者の感想とを掲載すべし●論説欄には毎號社友社員若しくは諸名士の手に成れる大論文を掲載すべし●文苑欄は小塚空谷氏の擔任にして毎號社會主義の歌を翻譯若しくは創作して掲載すべし●人物欄は西川光次郎氏の擔任にして毎號古今社會主義者の畧傳を紹介することに務むると共に、當今の人物の評傳をも掲ぐることにあるべし●名著綱要欄にては歐米社會黨名士の名著を紹介するに務むべし、先づ紹介されるべきは白耳義社會黨の首領ペンダベルトの名著『社會主義』と、英の有名なる社會主義者ロバート・アラチフオドの名著『幸福なる英國』

〔此の書は英米に於て八十五万部發賣されたりと云ふ〕なり●渡米案内欄は片山潜氏の擔任にして此の欄に於ては氏の在米十三年間の經驗談と北米の最近事情及在米會員の消息圖かるべし又會員は自由に質問を爲すことを得べし●社會時論欄にては普く新聞雜誌に現はれたる社會論及演壇講壇等より叫ばれたる社會論の摘要を掲載すべし●其他の諸欄も亦改良される所あるべし

申込東京神田三崎町三ノ一 片山潜宛

鎌倉圓覺寺宮長釋 宗演禪師序 鈴木大拙譯
獨逸哲學博士ポールケラス氏著

佛 陀 の 福 音

版三第
既成 全壹册四六判形上製
製本 金文字入綴クロイヌ装
正價 金七十五錢
○並製金五十五錢
○郵税各金八錢

佛陀は如何なる生涯を送り玉ひしか佛陀の垂れ玉ひし救ひの福音は如何なるものなるか 古來此が解説を試みたるもの少からざるも多くは是れ煩瑣困憊なる妖怪談にあらずんば乾燥無味なる記傳に過ぎず佛敎研究の聲日に盛んなるに 此の重要な疑問は依然として今猶ほ信者の胸中に凝りこみ 於て哲學者として佛敎研究家として有名なる ポールケラス氏 解決を試みられたるもの 本書は是れなりされば一たびこれをばれ佛陀の面目は躍如として紙上に現はれ紛糾の問救ひの福音は瞭々として耳底に響くべし故に本書の始めて米國に於て發刊に際したるが吾國に於ても鈴木大拙居士の手に譯せられしが刊本數日にして盡きしを以て本店大に此を發售せし昨年更にケラス氏の許にある大拙居士に屬して訂正を請ひ再版に附し此を江湖に頒ちたるもまた數月にして盡き久しく高需に背くに至れり依て今こゝに 第二版を發賣し廣に應ぜんす請ふ本店の 高潔なる佛陀の生涯と幽邃なる救ひの福音と併せて歐米人士が如何に佛敎研究に歩を進めたるかを見よ

發行所 東京市飯倉五丁目 森江本店
電話新橋二九七二
賣捌所 本郷春木町二 森江分店